7 紫黒米新品種「むらさきの舞（仮称）」の育成

ねらいと成果

アントシアニン色素は食品用着色原料として利用できるとともに色素自体に生理機能性があり、アントシアニン色素を多く含む紫黒米に関心が高まっている。そのような状況の中、赤色の清酒造り等の材料として、紫黒米品種「むらさきの舞（仮称）」を育成した。

内　容

育成経過：1982年に農林水産省熱帯農業研究センター沖縄支所で、バリ島在来の「紫黒稲」を母に、日本稲粳品種の「イシカリ」を父として交配を行った。1984年にF_3種子を譲り受け、以後系統育種法で育成した。旧系統名は「兵系紫51号」である。

品種特性：熟性は中生の中、長稈の穂重型で、多肥栽培では挫折型の倒伏をしやすくなる。アントシアニン色素は玄米果皮に集積する。玄米は長粒で、千粒重は25g前後である。

普及上の注意事項

本県の平坦部～中山間地に適する。落ちばえによる混種を防ぐため、毎年同一ほ場での作付が望ましい。収穫、調整の際は、機械内に籾、玄米が残留しないように注意する。

池上　勝（中央農技・酒米試験地）

表 「むらさきの舞」の特性概要

品種名	出穂期	成熟期	稈長	穂長	穂数	倒伏	葉いもち	脱粒性	玄米重	千粒重	粒形	粒色	粳糯の別
	月日	月日	cm	cm	本/㎡				kg/a	g			
むらさきの舞	8.26	10.10	108	21.8	275	中-ヤヤ強	中	ヤヤ難	43.7	25.0	長	黒紫	粳

注）生産力検定（1992～95年）による。移植期：6月15日 中苗手植え3本植　施肥：基肥にN成分0.4kg/aのみ